

2025年12月21日 第二礼拝 クリスマス礼拝 ～愛の灯～  
説教題『クリスマスの奇跡』第一ヨハネ4章16節、19節

主任牧師 加藤 誠

**「神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」(第一ヨハネ4章16節、19節)」**

クリスマスおめでとうございます。今年もこの礼拝堂であけぼの幼稚園の年長児によるページェントがささげられ、子どもたちがまっすぐ神さまに向かって歌う賛美歌が心に深く響きました。あけぼののページェントには「その他大勢の役」はありません。一人ひとりが神さまからいただいた役を大切に担います。自分だけでなく他の子のセリフもよく覚えていて、もしお友だちが休んだ時には代役に立ちます。お互いの言葉を聴き合っているのですね。「神さま、イエスさまをありがとう」の思いを真ん中に、みんなで支え合うページェント。そのページェントの冒頭は「キャンドルライトで浮かび上がる十字架」の場面から始まります。なぜ十字架なのか。飼い葉桶に生まれた赤ん坊は十字架において神の愛をあらわされた方であり、自分の楽しみや栄光のためではなく、神と人々の喜びのためにご自身をささげられた方だからです。

ページェントでは、年長の担任が選んだ賛美歌が一曲歌われるのですが、今年は「クリスマスの奇跡」という賛美歌が歌われました。「二千年前に生まれた方が今も変わらず世界中の人々の心を変えて小さな奇跡を起こし続けている。救い主が今日生まれた。世界に平和を与えるため。赦し合おう、愛し合おう。ここに愛と赦しがあるから」という賛美です。キリストは大きな奇跡を人々の前に見せつけるのではなく、出会った一人ひとりの心の向きを変える小さな奇跡を起こしていかれました。私たちの心は「まず自分！」という自分中心の矢印が多いのですが、その矢印が神や隣人に向けられていくように私たちの心の向きを変える小さな奇跡を起こしていかれたのです。

この賛美歌は約百年前の第一次世界大戦の時、最前線のドイツ軍とイギリス軍の間に起こった「クリスマスの奇跡」を下敷きに生まれた曲だそうです。クリスマスの夜、ドイツ軍の塹壕からドイツ語の「きよしこの夜」の賛美歌が聞こえてきたので、イギリス軍も英語の「きよしこの夜」を歌い返し、一時的に戦いをやめて戦死者を葬ったり、食べ物の交換をしたのだそうです。しかし、そのような兵士たちの勝手な休戦を軍の上層部は認めず、「勝手に持ち場を離れたものは容赦なく撃て！」という命令が出されて、以降そのような休戦は二度と起こりませんでした。クリスマスは、私たちが敵に向けて撃つ銃を手放すことを教えてくださったキリストの愛を覚える日。最前線で銃を持たされている兵士たちはほんとうは銃を撃ちたくないし、自分も死にたくない。しかし銃を持たされ「撃ち殺せ！」と命じられるのが人間の戦争。百年前の「ク

リスマスの奇跡」は戦争の愚かさと悲しさを伝えるエピソードでもあります。

今年のクリスマスは、朝の祈祷会の高齢の方々から「戦後八十年のクリスマス」に「世界の平和を祈る」というテーマが与えられました。かつての戦争を実際に体験された方々の平和への切実な祈りがそこに込められていると重く受け止めました。自分ファースト、自分の国ファーストで、邪魔をする相手を激しく罵倒する言葉が、国の指導者の口から次々に出てくる時代。つい数日前には「日本も核軍備をすべき」という言葉が首相官邸で語られたとの報道がありました。一発の核爆弾がどれほどの悲劇を生み、何十年も人を苦しめ続けるか。原爆を体験した国として、世界から核をなくするためにこそ英知と祈りを集めるべき私たちの間から核軍備を叫ぶ声が出てくる。私たちは人間の愚かさと悲しさをきちんと見つめると同時に、神さまがどんな思いと祈りを込めて独り子をお遣わしになられたのかを、このクリスマスに覚えたいのです。

二千年前、ローマ帝国の支配下にあったユダヤという小さな国の片隅で生まれたイエス・キリストは、神の愛そのままを生きられました。が、支配者たちは「目障りだ」と赤子をひねるようにしてイエスを捕え十字架で抹殺しました。主イエスの弟子たちも次々に牢獄に入れられましたが、不思議なことに主イエスの愛の教えはローマ帝国の人々の間にどんどん広がっていきました。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ 16：33）。人間の権力によってひねりつぶされたはずの主イエスの愛の御言葉は、恵みと真理に満ちた命の言葉であり、その御言葉に触れた者の心を神と隣人に向けて変え続けていったのです。「わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。」「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」（第一ヨハネ 4：16，19）。どんな権力も、この愛の御言葉の力を止めることはできないのです。

マザー・テレサの「死を待つ人の家」に世界中からボランティアに来た人たちが「また来ます！」と言って帰って行く際に、マザーは必ずこう言ったそうです。「ここに帰ってくる必要はないのですよ。あなたのすぐ身近にいる人のために、神さまのお手伝いをしてください。たとえば、子どもが『ただいま！』と帰ってきたら『おかえり！』一番素敵な笑顔で迎える。愛する家族や友人のために心込めて温かい食事を作る。街の中で誰か困っている人を見かけたら「何かお手伝いしましょうか？」と声をかける。『してあげる』ではなく、『わたしもしていただいたから、お互い様』の気持ちで、神さまからいただいた愛を分かち合っていく。そんな神さまのお手伝いをしてください」と。二千年前に生まれた方は今日も私たちの心の向きを変え続けています。メリークリスマス。神さま、一番大切なものをありがとう。